

# Wild な数学 ケモノの数学

淡中 圏

グロタンディークは『Esquisse d'un Programme』でペアノ曲線などの空間充填曲線やバナッハ・タルスキーの定理のような病的な例を生み出さないようにトポロジーの基礎を作り替えるプログラムを提唱し、その目標を **tame topology**、すなわち手懐けられたトポロジーと名付けた。

それに対して、古典的手法がどうかこうにか扱ってきたトポロジーは **wild topology**、すなわち野生のトポロジーだ、というのだ。

またシェラハは、『On what I do not understand (and have something to say)』という集合論の進むべき道について書いた論文に、**666** という番号を付けている。

これはもちろんヨハネ黙示録の

ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は 666 である。

の引用であると考えられる。

シェラハの意図は明らかだが、この引用ではおそらく「獣の数字」という部分には特に意味は与えられていないのであろう。

しかし、グロタンディークのアイデアと絡めると、なんとも面白い気もする。

数学にはまだまだ野生の対象、ケモノの数学があふれているのだ。tamer として手懐けようとするもよし、naturalist としてその脅威に感嘆するもよし。

さあ、装備を整えて今こそ数学の原野に出発しようではないか！